

【 From Kobe 8月 ひまわりの夏 2016 の 便り 2016.8.5 .】

2016年 ひまわりの夏到来 お変わりありませんか
暑い酷暑 熱中症にかからぬようご注意ください

「蝸牛 角ふりわけよ 須磨明石」 梅雨明けを待ちかねたように一斉にセミが鳴きだし、
久しぶりに登った山からは須磨の海が遠くまで見渡せる 気持ちも晴れ晴れですが、酷暑が定番となった暑い夏



今年も奥播磨に原チャリを走らせ、
元気なひまわりに出会ってきました。
黄色のまん丸の顔・顔・顔
一斉にこちらを向いて「よう!!」と
この姿に出会いたくて 通いだしてもう何年になるで
しょうか? 緑の山里を駆け抜ける爽快感と明るいひ
まわり 私の夏迎え
みんなにも ひまわりの元気な姿を届けたい。

「2016 ひまわりの夏

2016.8.5. from Kobe

Mutsu Nakanishi



東播磨 小野のひまわりの丘で ひまわり畑を埋め尽くす 元気な顔に出会えました 2016.7.11.



2016.7.20. 奥播磨 奥播磨佐用 林崎 & 宝蔵寺の郷で

◆ 8 月 自らと向き合って 平和の危機「憲法九条を守ろう」

法政大学田中優子氏の憲法論議についての視点のご紹介

2016.8.1. From Kobe by Mutsu Nakanishi

8 月 1 日の神戸新聞の朝刊の「月曜オピニオン 識者の視点」の欄に掲載されていた

法政大学田中優子総長の意見文 「国民投票に備える 改憲論議 事実知る努力を」との記事に目が留まった。今の政治を「理想や理念の創造力よりも 政治の技術を重視し、誇り、それに頼ってことを進めているように見える」と述べられている。

いろいろなことが去来する8月 仲間・家族 そして社会のこと等々。でも 毎日がなんとわなしに過ぎてゆく。そのありがたさを感じつつも、見聞する社会の激しさ・異常さ・地球環境変化の おそろしさなど先行きへの不安感は増大の一途を。そして「国際・グローバル化」の衣に包んで ひたひたと進む戦争への踏み込みが急速に進む勢い。刹那的な今の利しか追わない政治が多数派を占め、平和主義憲法の砦「憲法九条」の危機が現実のものに。

いつも 選挙のたびに 感じていましたが、 今度ばかりはついに少数派 ほんとなんか… こんなに多数派の人たち婆多いのか……とそのギャップの大きさに意気消失。

最近では 多数派ではないなあ…と感じることの多いシルバー世代 自分の身の置き所のなさに無力感だよう。若者が老練な政治に翻弄されているように見えて仕方がないのですが、 どうせ 年寄りのボヤキ 口はだすまいと。

そんな8月の初め ふと見た新聞に法政大学田中優子総長の意見文

「国民投票に備える 改憲論議 事実知る努力を」の記事が目にとまり、勇気づけられました。

(今の政治)は「理想や理念の創造力よりも政治の技術を重視し、誇り、それに頼ってことを進めているように見える」 「国民投票に備える 改憲論議 事実知る努力を」と。

神戸新聞 2016. 8. 1. 朝刊 「識者の視点」欄 法政大学総長田中優子氏の視点より

田中優子氏の視点の私の理解は次の通り。

今まさに政治・憲法論議の転換点にあるこの時にも

「今の政治家たちは創造力・知恵のなさをひた隠し 政治の職人たちの政治手法に多数の人たちがたぶらかされている」との視点と読みました。

今の政治家が一番隠したいことに、ズバーと切り込む鋭い視点である。

「平和憲法を守る」というと まるで骨董品のように、そんなことで平和が守れるか?と門切り型の攻撃が来る。

でも 日本が戦後著しい復興を遂げ、繁栄を謳歌できるまでに成長できたのも 戦争に巻き込まれなかったことによることが大きい。昨今の周辺諸国を見るだけでも 明らかですが、多数派はこれを評価しない。

またそろ「そんなことで 国を守れるか…」とほかのことでは「個人・個人という」連中が 異口同音 国を持ち出す。何か信用ならぬ裏があると感じるのは 私だけか……。

また、縄文人は厳しい生活の中で 世界に類を見ない1 万年を超える永続社会を維持し続けたことが明らかになっている。 ここにもまた、平和を愛する日本人の心・知恵が生きていることに世界が注目する。

「日本の縄文ぐらい 勉強すればいいのに」と思うのですが…

今は受け継ぐ政党もなくなった革新少数派。 多数派の思うがままに 少数派の力がますます封じ込められている、そんな 少数派の意見の中にこそ、しっかりと時代を見つめる視点・正論がうずもれている。

今 声をあげねば……。

少数派・多数派どちらにもくみせず、冷静に今も分析するに憲法論議のスタート論・視点

是非 憲法論議 平和を考える視点として 一読・一考をとご紹介。

次ページに 神戸新聞に掲載された田中優子氏の視点を転記させていただきました。

法政大学総長田中優子氏の意見文 「国民投票に備える 改憲論議 事実知る努力を」
参考になればと記事を転載させていただきました。

EU離脱を決めた英国の国民投票を思い出す。離脱が国民経済にどんな結果をもたらす、何が起こるのか、よく分からないまま、あるいは間違った情報を鵜呑みにして投票し、「後悔」した人々が少なかつたという。改憲論議に投票した日本の方々は、然る自民党の改憲案を読んでいただろう。だが一方で、無作為に聞いた人々の半分以上が「3分の2」というキーワードを知らなかつたとの報道もあつた。背景が寒くなる

政治の職人

憲法96条は改正について「各議院の総議員の3分の2以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならぬ」と定める。改憲の意志と草案を明確に持つ自民党が他党との調整は残るものの、その発議権を手にしたというのが今回の参院選の意味である。自民党がこの好機を逃すはずがない。国会発議と国民投票はおこなわれるだろう。

識者の視点

法政大総長

田中優子氏

改憲論議 事実知る努力を

国民投票に備える



たなか・ゆうこ 1952年横浜市生まれ。法政大大学院修了。2014年4月から現職。専攻は近世文学、アジア比較文化。著書に「自由という広場」「江戸百夢」など。05年紫綬褒章。

自民党の改憲案では、天皇を象徴から元首に変え、国防軍を創設し、家族を基礎とする国づくりを打ち出している。公明党は、改憲ではないかのように「加憲」という表現を使うが、自民党草案も9条の部分は「条項国防軍」、9条3項「領土等の保全」などの「加筆」が大半である。公明党の「加憲」はどうかというのか。

改憲と経済が別々の争点であるかのように受け取る人もいる。両者を無関係に見せかけているのには、政治手法だ。どうやら今の自民党には政治の「職人」がいる。理想や理念の創造力よりも政治の技術を重視し、誇り、それに頼ってことを進めているように見える。

むろん、アベノミシスの経済効果を期待して投票した方々は、その経済成長路線が、改憲草案の国家像を前提にしたものであることなど、とくに存心なのである。

連携の象徴

共存から対立へ、世界が動く背景には権力構図の変化がある。米国は世界の方向を決める力を失いつつある。実際、イラク戦争以降、問題を広げるばかりで制御できていない。そこで、だいぶ前から米国は「連携強化」という名の「囲い込み」を強めている気がする。その象徴が沖縄だ。日米両政府の沖縄への執着は、そこに暮らす人々の協力を得られるのか、という大きな問題を含めて、基地としての適否を現実的に検討するだけの冷静さを欠いている。そしてその背後には多くの日本人の無関心があり、世界の米軍基地の現状や周辺の暮らしに対する多くの米国人の無関心がある。

連携強化の象徴が沖縄だとすれば、その要は改憲にある。「日本独自の憲法」と言う政治家がいるが、本気だろうか。日本にしかない、新しい世界の方向を示す憲法とは、今の憲法のことである。自民党が目指している憲法とは、米国の求める連携強化の中で生み

れた、君主と軍隊を持つ「普通の憲法」である。

政治家だけが国や社会をつくるわけではない。いま必要なのは政治家や官僚に丸投げ、おまかせにしない姿勢である。外国人の差別や排斥、好戦的な世相が今後とも強まっていくなう。それは政治の技術に私たちが棄せられているからだ。政治の現場では、国内の格差問題を他国に責任転嫁し、国民の排外感情をあおるといふことが平然とおこなわれる。意図的に戦争準備に入ることで、大企業による「戦争経済」を活性化しようとする。

スペインに「反わき戦略」という運動があるようだ。「移民のせいで医療費がぐらんである」など、多様な問題の責任を移民に転嫁しようとする言説を集めて、データで検証し、事実を国民に知らせる。いま私たちに必要なのは、こうした姿勢ではないか。事実を知る努力を続け、事実を周知することによって、事実無根のうわさや責任転嫁を排除する。そして、国民投票に備えるのである。

月曜オピニオン